
飛行機が落ちた

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛行機が落ちた

【Nコード】

N8143H

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

私が仕事をしてたら、緊急病院から連絡があった。それは兄が大きな事故に巻き込まれたという知らせだった。兄はなんとか一命を取り留めたものの、右手を失ってしまう。だがそれ以後、無いはずの右手が痛むと、兄が叫びだしたのである。

私が仕事をしていた時。

緊急病院から連絡が来た。

どうやら兄が乗っていた飛行機が、墜落つらくしたらしいのだ。

状況は分からなかったが、私は慌てて病院に向かった。

「貴方のお兄さんは集中治療室に入っています。感染の危険があるので、面会は出来ません」

診察室で悲痛な顔をした医者が、そう説明してくれた。

私は突然そう言われても信じられず、少し放心していた。

すると医師が、

「ご心配でしたら、映像で一目見てみますか？ 監視用なので、少し画像は荒いですが」

と言ってくれた。

私は、一目だけでも無事を確認したかったので、何度も頷いた。

しかし次の瞬間、言葉を失ってしまう。

ベッドの上で寝ている彼に、兄の面影は無かった。

全身の殆どに包帯が巻かれ、頭や手足に点滴のチューブが付けられていた。

「始めは、もつと酷い状態でした。身体も、バラバラに近かったです」

私は震える唇を噛みしめ、助かるのですか、と尋ねた。

「大丈夫、峠は越えています。右手は無くなりましたが、訓練次第では私生活に影響は出ないでしょう」

医者のおっしゃるとおり、兄貴は死ななかった。

顔も整形で治し、時間はかかったが訓練を重ねて一人で歩ける所まで戻ったのだ。

しかし、全てが順調ではなかった。

兄貴が無くなった右手の事で、苦痛を訴えるようになったのだ。

仕方なかったなので、私は医師に相談した。

「それは幻肢痛げんしつうという奴ですね。右手が残っている時の記憶が強すぎて、今が苦しくなってしまう病です」

私は治療法は無いのですか、と尋ねた。

「今の所、決定的な方法はありません。長い間、セラピーを受け続けたら起こらなくなつたという人もいますが、その反対の人もいます。ただ解決のカギは、心の中にあるようです」

それから私達は医者のおすすめに従い、精神科に通う事になった。

私も兄の幻肢痛が直るよう、一緒に努力した。

書物を読みあさり、痛みが完治した人に話を聞いて回った。

だが、それでも兄は右手の痛みを訴えたのである。

酷い時には、一日中叫び続けていた。

その姿があまりにも可哀想だったので、麻酔の注射をして抑えた時もあった。

ある日。

私がテレビを見ていた所。

気になる緊急ニュースが放送された。

兄と同じ飛行機に乗っていた有名人も生き残っていたが、数日前にとうとう死んでしまったらしい。

そして、これから告別式が行われるのだと、コメンテーターが言っていた。

テレビに棺桶に入れられた死体が映し出される。

その時。

私は違和感を感じた。

いや、私だけではなく、コメンテーターも同じだったらしい。

「しかし、何故、右手だけ血色が良いのでしょうか。とても、死んでいる人の手とは思えませんねえ。もしかしたら、これは神の生き返ろという意志なのかも知れません」

そんな馬鹿な話があるものか。

普段なら、私もそう思ったかも知れない。

だが、そうだと言うには、あまりにも兄の右手に似ている様な気がしたのだ。

死体の手首には、生々しい結合の跡も残っている。

墜落事故の衝撃で体がバラバラになり、医者が復元する相手を間違えたとでもいうのだろうか。

私には、わからない。

やがて告別式が終わり、出棺の時間となった。

棺桶が、巨大な火葬する為の機械に入れられる姿が映されていた。

ふと、私は後ろにいた兄を見るが、何も変化は無い。

だが一応、右手はもう大丈夫なのか、と尋ねておいた。

「ああ、大丈夫。嘘のように何ともないぜ。数日前ぐらいまでは、結構痛かったんだけどよ。お前は気にせず、ゆっくりテレビでも見てるよ」

それは良かった。

私が胸をなで下ろした時である。

悲鳴が聞こえてきたのだ。

私は振り返った。

声は火葬場にいるリポーターが叫んだようだった。

そしてテレビの映像には、綺麗に焼け上がった普通の人骨が映っていた。

だが、それ混じって異様なモノが見えた瞬間。

私はゾクツとした。

右手の辺りの骨が、微かに動いてたのだ。

幾つかの細かい破片が、まるでミミズのようにウネウネと蠢うごめいていたのだ。

「な、大丈夫って言ったろ」

振り返ると、笑顔で右腕をふっている兄の姿があった。

私は慌てて、もう一度映像を確認した。

血の気が引く。

私に向かってバイバイと、兄の骨が動いているのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8143h/>

飛行機が落ちた

2010年10月17日09時13分発行